スキップ続出で供給大幅減へ

在来向け米松輸入製品

日本向け値上げ困難でオファー断念

在来向け米松輸入製品の第4・四半期契約はオファーを見送るシッパーが増え、供給量は大きく落ち込む見通しだ。北米製材市況の暴騰で産地の機会損失が拡大している状況はSPFと同様。だが、在来向けは競合材が多いだけに大幅な値上げは市場では到底受け入れられない。大手のシッパーは積み遅れによる受注残も多く、強引な値上げで競争力を失うより新規の契約を見送ったほうが得策と判断した模様だ。

米松KD小角のオファーを出したのは米国の大手1工場のみで、成約価格は1056ドル（C&F、1000BM、アクチュアル）と前回比73ドル高。輸入コストは1ドル106円として5万2000円弱（港オントラ、立方メートル）と同3000円高。産地価格は第1、2・四半期に比べ5ドル高いが、円高で輸入コストは第1、2・四半期並みに戻る見通しだ。

「丸太コストが3カ月間で15%上昇しており、産地と折半で半分の7%を負担してほしい」というのがシッパーの要望。本来値下げする局面でなかった第3・四半期の値下げを元に戻したいとの意志もあり、提示価格は修正せずに押し切った。

米国の一方の大手は10、11月積みをスキップした。丸太価格の上昇で採算が悪化していることや、第3・四半期の積み遅れが多く、受注残の消化を優先する必要があったことがオファーを断念した理由。新型コロナの影響で従業員が集まりにくく、人手不足で生産性が上がらないという。収益率の高い米国向けの生産を増やすことで採算改善を図ると同時に、11月までに日本向けの積み遅れを解消し、12月積みからのオファー再開を目指す。

カナダ沿岸のシッパー2社も不採算を理由に米松のオファーは見送った。これにより積み遅れ分を除くと小角の10、11月積みは通常に比べて最大6割程度減少する見通しだ。

カナダ内陸及び米国の羽柄材シッパーは、数量は通常の5～6割水準だが、オファーを出した。タルキは1108ドルと前回比59ドル高。輸入コストは5万4000円強と同2000円高。

米松製材の入荷量は7月までの累計で18万6168立方メートル（前年同期比17・7%減）と低調。コロナ禍で需要の縮小が見込まれたことに加え、5月下旬の国内挽き米松製材の値下げにより第3・四半期にかけて引き合いが大きく減退したことが背景にある。

だが、新設住宅着工は7月まで前年比1割強の減少で踏みとどまっているうえ、プレカット工場の稼働率も大手を中心に高水準。恐れたほど需要は落ち込んでおらず、米松製材需給は引き締まっている。新規契約のスキップが続出したことで年末にかけて供給が一段と減るのは確実で、需要が盛り返せば品不足に陥る恐れもないとは言い切れない状況になってきた。